

# 小児の行動異常と乳児栄養との 関連に関する研究 —— (2)

木村 三生夫, 杉森 美代子,  
伊東 俊一 (東海大学医学部小児科)  
牧田 清志, 山崎 晃資,  
猪股 丈二, 林 雅次,  
渥美 真理子, 松田 文雄,  
川井 貴子 (東海大学医学部精神科)  
大塚 乙子 (神奈川県立厚木児童相談所)

## はじめに

前年度(昭和55年)の研究では母親の授乳行動(6類型)を中心に、何らかの行動異常を示す行動異常児群、(神経症的発症、自閉症、脳器質障害、精神発達遅滞、発達性言語障害、その他)との相関を疫学的調査法に基づき検討を加えた。

今回は同一調査法による正常対照児群との比較検討を試み、早期母子関係における授乳行動とその環境的背景の意味づけを考察した。

## 対象と方法

正常対照児群として、神奈川県H市で実施している1才6ヶ月健診受診児355名(ただし、保健婦、小児科医、臨床心理士によってチェックされた者を除く)と、同市内保育園(6施設)に在園する3才から6才迄の障害児を除く健康児347名との計702名を対象として、アンケート調査を行った。

このアンケートの内容は、前年度用いた問題行動と乳児期の栄養方法に関する調査項目とほぼ同一のものであるが、削除した項目は、⑤の14(東海大学病院でのお子様の診断名、⑦の口(当大学病院以外に受診、相談などされた機関があればお知らせ下さい)である。

## 調査方法

- 1) 地方自治体で実施している月2回の健診を利用し、保健婦が直接母親に手渡しその場で記入・回答してもらう方法をとった。期間は56年10月から12月迄。
- 2) 保育園在園児については園長あるいは担当保

母から、母親あるいは母親代理者に直接手渡し1週間以内に回収した。調査時期は56年11月である。

## 結 果

アンケートの回収率は100%であった。アンケート用紙の回収については市内各保育園の園長、担当保母、および担当保健婦の方々がこの趣旨を十分に理解してくれ協力が得られた。さらに直接手渡し方式を採用しているためアンケート項目に関する疑問などにその場で答えることができた。従って100%という好成績が得られた。

回収されたアンケート項目を次のように整理し、その結果を図1~11にまとめて示した。

### (1) 年齢分布と男女比(図1)

1才; 355名(50.5%) 2才; 2名(0.3%)  
3才; 47名(6.7%) 4才; 97名(13.8%)  
5才; 115名(16.4%) 6才; 86名(12.3%)  
である。その男女比は、53.6%(376名)対46.3%(325名)である。1才児が50.5%を占めているのは前記のように1才半健診を利用しているためである。

### (2) 授乳方法(図2)は前年と同様に母乳栄養、人工栄養、混合栄養を6つに分類した。

母乳; 18.9%(133名), 人工; 20.5%(144名), 母乳+人工→人工; 27.7%(194名), 母乳→人工; 23.2%(163名), 人工→母乳2.7%(19名), 母乳+人工乳6.4%(45名)である。

### (3) 産前産後の協力者(図3)

出産前後における協力者の様子を夫、実父母、義父母その他にわけて調査した。夫；20.1%（141名）、実母；59.5%（417名）、義母；15.2%（107名）、実父；1名、義父；0名、協力が得られなかったのは1.6%（11名）であり前年度は5.5%（18名）であった。

図4以下については、次の様にまとめて整理した。

(4) 協力の場（図4）

(5) 分娩、妊娠中、新生児期の各状態（図5）

(6) 授乳者、継続的母親代理者の有無（図6）

母親の授乳は96.7%（678名）、母親代理者による授乳は3.1%（22名）でその内訳は（6のII）図の如くである。母親代理者の中に母乳授乳者3名が含まれているのは興味深いことであった。

(7) 離乳状況（図7）

(8) 離乳知識の入手経路（図8）

育児書による離乳知識の入手経路は50.5%（354名）、其の他が21.9%（154名）であり、これは近隣からの情報入手が目立ち母親と近隣との良好な人間関係が伺える。

(9) 離乳開始時期（図9）

4ヶ月未満；16.8%（118名）、4ヶ月以上で開始しているのが77.5%（544名）である。これは神経症的発症群では24%（26名）、72%（66名）であった。

(10) 離乳完了時期（図10）

10ヶ月未満；11.4%（80名）、10ヶ月以上；71.4%（501名）である。前年の神経症的発症群では14%（15名）、58%（61名）であった。

(9)、(10)より 正常対照児群の方が乳児の要求充足的傾向を示すように思われる。このことは養育者が乳児の情緒的発達に対応する姿勢とも解釈される。

(11) 両親の年齢、健康状態、学歴、職業。

## 考 察

今回のアンケートの調査対照児は健康な乳幼児355名について行った。本研究は前年度の行動異常群とくに神経症的発症群と正常対照児群との間に何らかの授乳方法の偏りが見られるかどうか

について比較検討した。このことは早期母子相互作用という観点から、その基本となっている授乳行動を中心とした幼児をとりまく環境的因子が、子供の情緒的発達にどのように寄与しているかを考察した。

(1) 行動異常児群（327名）と正常対照児群（702名）との授乳方法について比較したものが（図12）である。母乳単独栄養では、行動異常児群；13.8%（45名）、正常対照児群；18.9%（133名）、人工単独栄養では行動異常児群；29.4%（96名）、正常対照児群；20.5%（144名）である。人工単独栄養は行動異常児群に多い傾向を示している。

次に、混合栄養について母乳が多少でも授乳されている場合に母乳群とし、一方全く母乳が授乳されていない人工単独群とを比較すると表1のようである。

このことから、正常対照児群の母乳群は行動異常児群より、11.4%の高率である。

さらに、行動異常児群の診断分類の中から主な疾患である神経症的発症児（N）、自閉症児（A）、脳器質障害児（O）を抽出して正常対照児（C）と比較すると、表2の如くなる。

母乳群について、 $C > N > A \gg O$ となり、人工単独では、 $O \gg A > C \cong N$ となる。このことから脳器質障害児において4割が人工栄養単独であることを示し、正常対照児群では約8割が母乳栄養群で占められていることが分かった。授乳行動の意味づけとして、授乳とは単に身体的栄養的供給のみならず、授乳という行動を通じて母子の相互作用が形成される一つの行動である。乳幼児の精神分析的情緒発達理論では部分対象から全体対象の移行の時期に“ほどよい母親のかかわり”の重要性が強調されており、母乳栄養のもつ意義は幼児の情緒発達にとって極めて重要な一つの要素である。

(2) 産前産後の協力者（図3）の中で、夫の協力の有無についての行動異常児群と正常対照児群とを比較すると、前者が51.7%（169名）、後者が20.1%（141名）となっている。行動異常児群では幼児の超早期時期にすでに夫の協力を必要とする者が約5割を占めており、このことは子供の取り扱い難さを暗示しているのではなからう

かと思われる。

### ま と め

小児の行動異常と乳児栄養の方法について、第2年次として正常対照児群702名の乳幼児アンケート調査の結果は次の通りである。

①産前産後の協力者の中で夫の協力が5割以上を占める行動異常児群について、超早期の母子相互作用においてすでに将来を暗示する要素が含

まれているように思われる。

②母子相互作用における乳児栄養方法と行動異常に関する領域では脳器質性障害を除いては、顕著な差はみられず、7割以上の乳児が期間を問わなければ、母乳授乳を受けていることがわかった。

従って単に授乳方法のみの比較から、その行動異常に結びつく要素を見いだすことは難しく、授乳行動をとりまく環境要因について今後さらに詳細な検討を加えていくことが必要と思われる。

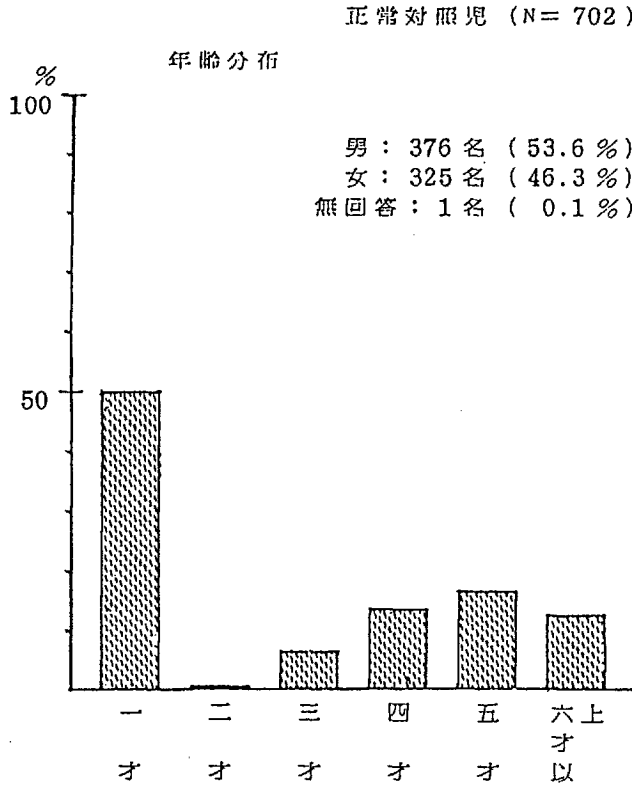


図1

正常対照児 (N=702)

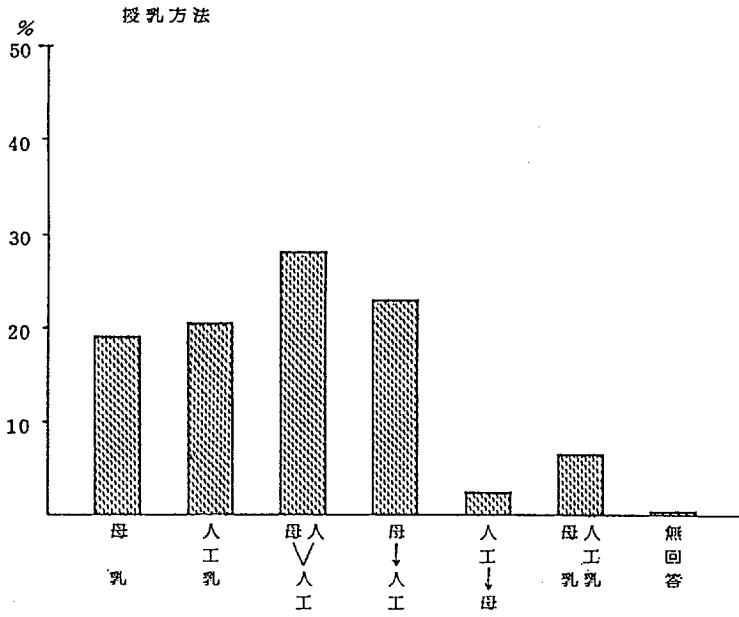


図 2

正常対照児 (N=702)

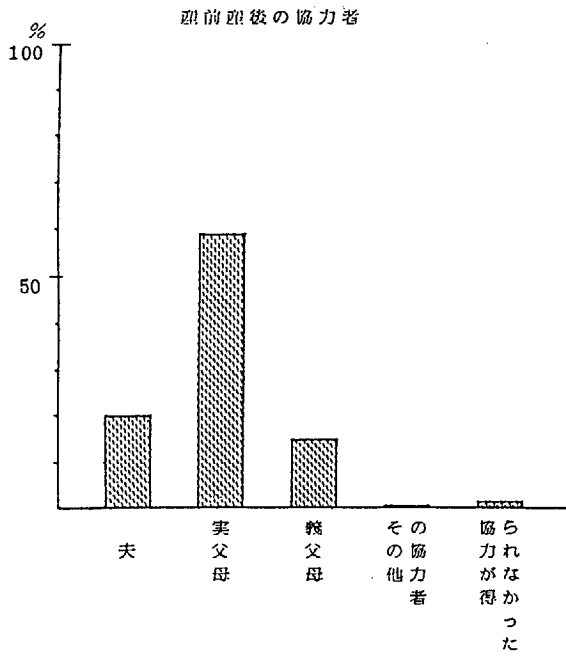


図 3

協力の場

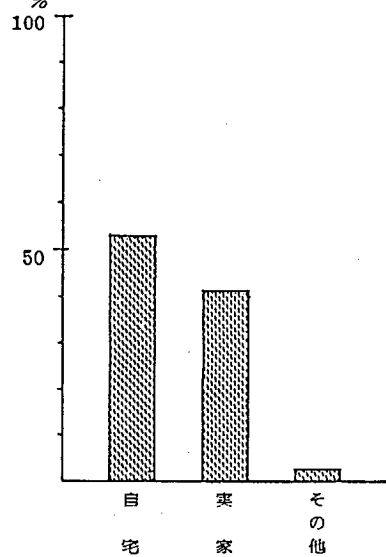


図 4

正常対照児 (N=702)

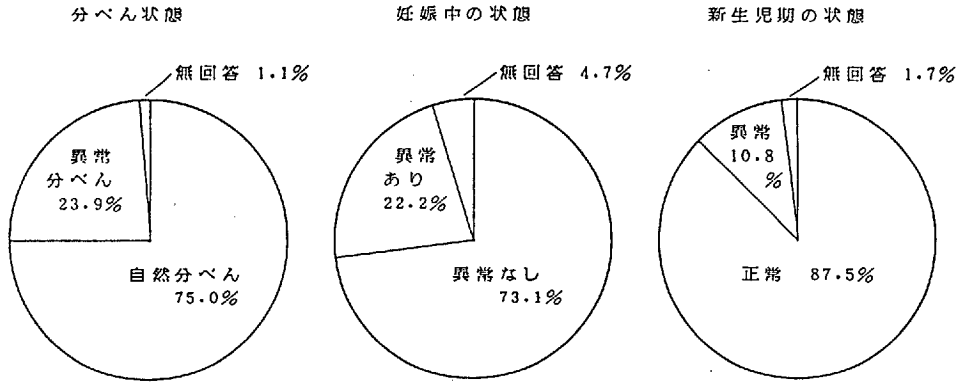
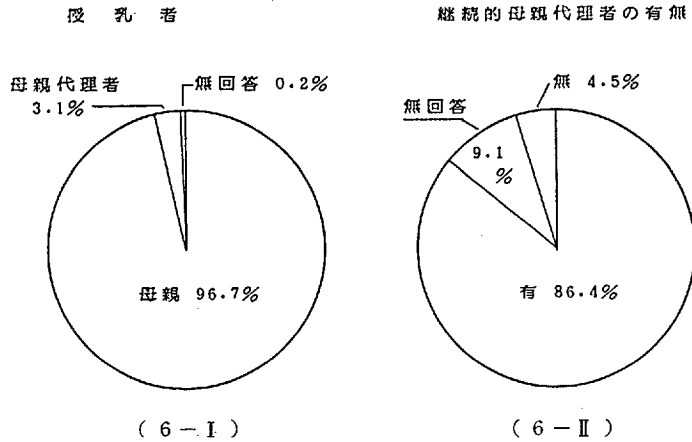


図 5

正常対照児 (N=702)



(6-I)

(6-II)

図 6

正常対照児 (N=702)

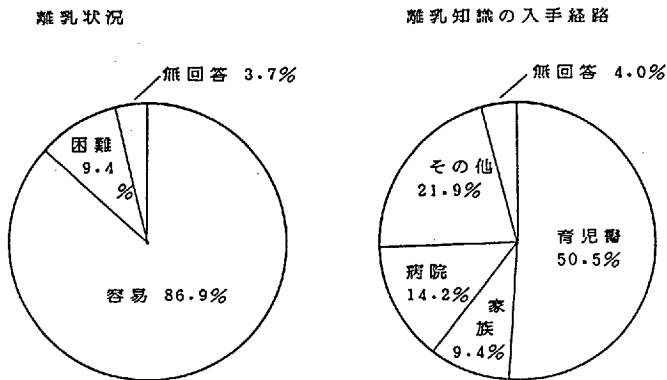


図 7

図 8

正常对照兒 (N=702)

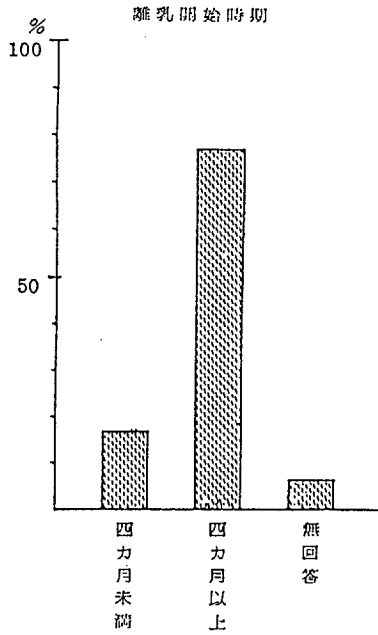


圖 9

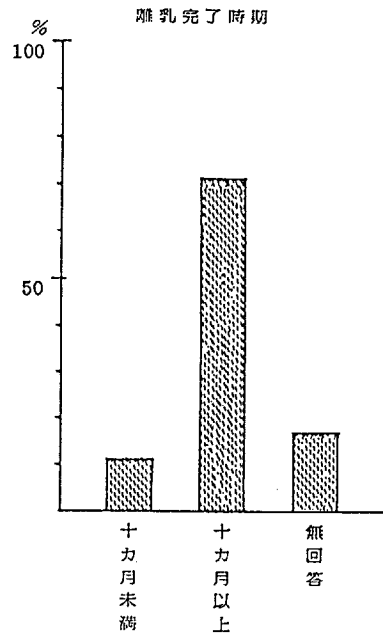


圖 10

表 1

	正常对照兒群	行動異常兒群
母乳群	78.9% (554名)	67.5% (221名)
人工单独	20.5% (144名)	29.4% (96名)

表 2

	C	N	O	A
母乳群	78.9% (554名)	73.8% (79名)	56.4% (31名)	71.9% (69名)
人工单独	20.5% (144名)	19.6% (21名)	40% (22名)	28.1% (27名)

正常対照児 (N = 702)

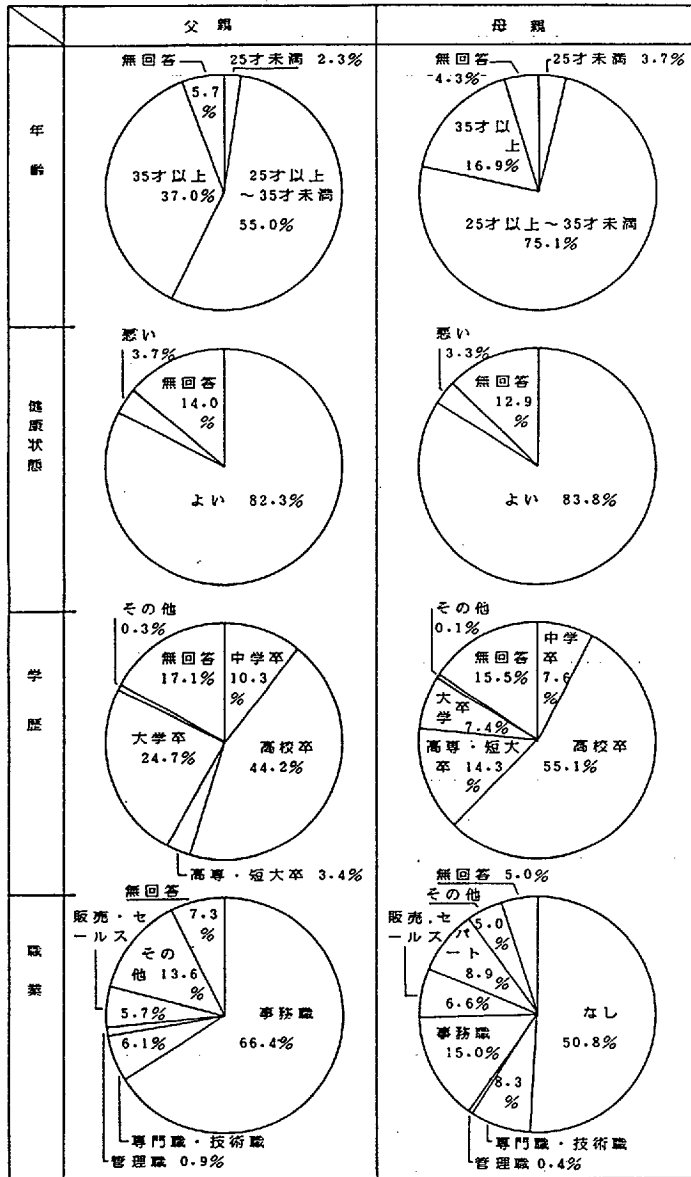


図 11

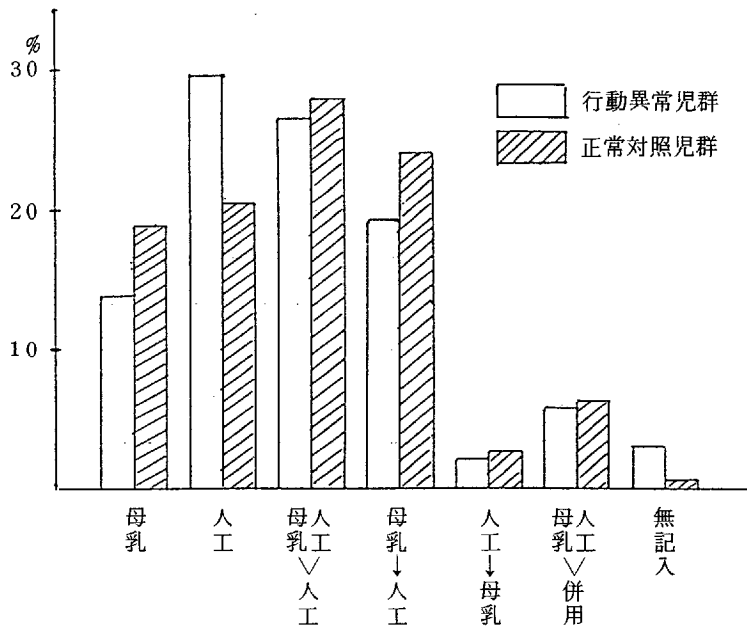


図 12 授乳方法・行動異常児群と正常対照児群の比較





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

前年度(昭和 55 年)の研究では母親の授乳行動(6 類型)を中心に,何らかの行動異常を示す行動異常児群,(神経症的発症,自閉症,脳器質障害,精神発達遅滞,発達性言語障害,その他)との相関を疫学的調査法に基づき検討を加えた。

今回は同一調査法による正常対照児群との比較検討を試み,早期母子関係における授乳行動とその環境的背景の意味づけを考察した。